

はかなり疲れていたようであったが休養はとらず、全員でベース・キャンプを出発する。先発の二名は高度に慣れたのか、たいてい息切れもしない。後発の二人は苦しうだった。その日はC1どまり。二十五日、C2にはいった。すでに高度に慣れている先発メンバー二人をアタック隊とし、後発キャラバンのメンバーをサポートに当て、二十六日、C3を建設し、アタック隊二人がC3にはいった。

二十七日、三時三十分起床。いよくアタックの日である。昨夜はビバーク用シュラフのためすごく寒かった。コンロの調子が悪く、いらいらしながら食事を作る。どうにかラーメンを一杯だけながしこみ、五時二十分出発する。全く快調で高度の影響は見られない。少し呼吸が苦しいだけだ。六四〇〇メートルの高山を登っているとは思えないようだ。七時頃難関の第二岩峯を乗っ越したのもつかの間、雲が急速に広がってくる。

天氣に追われるようにして登る。八時四十分頂上着。かなりのロングランになると予想していたのに、意外に早く登ってしまった。頂上では、日本、パキスタン両国旗および鳥取県旗をかかげパノラマ写真を撮った。またたく間に一時間がすぎ、天候悪化のすすむ頂上をあとにした。この日アタック隊はC2まで下り、第二次隊がC3に入る。

二十八日、前日來の悪天候もどうにかもちなおした。ベースキャンプに入って五日目の第二次アタック隊は高度に苦しんだが、何とかそれを克服し、無事登頂に成功、全員C2に集結した。二十九日、ベース・キャンプに下る。ベース・キャンプではムサ氏がわれわれの成功を大喜びで迎えてくれた。

帰国後、山陰地方初めての遠征隊を記念するために、また現在でもこの山に名前がついていないことから、この山にヒム・ゾム（雪の山）と命名した。